仙台北三番丁教会
2023年7月9日 三位一体後第5主日

弟子の本分

代務牧師　齋藤　篤

聖書　ヨハネによる福音書1章35～51節
35 その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36 そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神
の小羊だ」と言った。37 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38 イエスは振り返り、彼らが従って来る
のを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まってお
られるのですか」と言うと、39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行っ
て、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのこと
である。40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであっ
た。41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――
に出会った」と言った。42 そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたは
ヨハネの子シモンであるが、ケファ――『岩』という意味――と呼ぶことにする」と言われた。
43 その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。
44 フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。45 フィリポはナタナエルに出会って言った。
「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフ
の子イエスだ。」46 するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、
「来て、見なさい」と言った。47 イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。
「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」48 ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておら
れるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木
の下にいるのを見た」と言われた。49 ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエル
の王です。」50 イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるの
か。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」51 更に言われた。「はっきり言っておく。天が開け、神の天
使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

今、お読みしました聖書の言葉は、イエスが洗礼者ヨハネからバプテスマ（洗礼）を受けたのち、神の国を宣べ伝えるという務めに入られますが、その務めをともに行うための「弟子」を召し出されたことについて書かれた最初の記録です。それは、洗礼者ヨハネの勧めによって、イエスの弟子となった2人。そのひとりであった漁師アンデレの勧めによって、彼の兄弟シモン・ペトロ、彼らと同郷であるベトサイダ出身のフィリポと、同じくガリラヤ地方にあるカナ出身のナタナエルという、フィリポに誘われた人物が、イエスによって弟子とされたことが記されています。

しかし、このヨハネによる福音書に書かれている「最初の弟子たち」の記録は、他の福音書であるマタイ・マルコ・ルカの、いわゆる「共観福音書」と呼ばれている書で描かれている物語とは、かなり違うことが分かります。おそらく、よく知られているその物語とは、漁師をしていたペトロにアンデレの兄弟、そしてゼベダイの子ヤコブとヨハネの兄弟が、漁場という現場において、イエスによって弟子として召し出されるというものです。

人間をとる漁師となりなさいというイエスの呼びかけがあったり、夜通し漁をしたけれど、魚がまったくとれなかったところに、イエスがもう一度網をおろしてみなさいと言ったところでのやり取りがあったりだとか、漁師という彼らの生業を捨てて、イエスの弟子になったというエピソードを、私たちは聖書からよく聞くことがある

のです。

それに比べて、ヨハネによる福音書で描かれている物語は、まったく違った場面の設定がなされているのです。まず、イエスにバプテスマを授けた、洗礼者ヨハネが登場します。そのヨハネの「見よ、神の小羊だ」という言葉によって、イエスに従ったアンデレ、アンデレの誘いを受け、同じくイエスの弟子となったペトロの物語が書き記されています。その後、イエスによって召し出されたフィリポ、そして、おそらくフィリポの友人であったであろうナタナエルが登場します。ナタナエルに至っては、いわゆる12人の「使徒」と呼ばれる人々のなかにはその名が記されていません。一説によれば、彼は使徒のひとりであるバルトロマイだったのではないかとも言われていますが、そのこともはっきりしません。大体、ヨハネ福音書ですら、ナタナエルが登場するのは、この場面の他には、イエスが復活されたときに、その名前が記されているだけです。彼については、本当に謎だらけなのです。そして、他の福音書には、アンデレとペトロの他に、最初の弟子たちとして描かれているゼベダイの子ヤコブとヨハネについては、まったくこの場所では記されていません。このヨハネとは、この福音書の筆者であるヨハネ本人のことを指していると言われていますから、もしかしたら、自分自身のことを書き記すのは控えたのかもしれません。とにかく、ヨハネによる福音書では、他の福音書とは違った角度から、この物語を書き記していることが分かります。

ただ、他の福音書と共通する部分もありますし、実はこの共通する部分こそ、イエスの弟子たちという話題を語るうえで、決して欠かすことのできない中核部分があると言って間違いありません。ここにこそ、今日の説教のタイトルとした「弟子の本分」というものが表れている。私はそう思えてならないのです。

では、その本分とはなんでしょうか。アンデレにしてもペトロにしても、フィリポにしてもナタナエルにしても、イエスによる招きの言葉に促されながら、イエスの弟子となるという決断をし、彼に従ったという点です。イエスの招きに答え応じる弟子たちの姿というものが、その後、長い歴史を経て現在にいたるまで、イエスの弟子とさせられている私たちひとりひとりにも及んでいるということなのです。

そのことは、一見すると何の不思議もないように思える出来事です。しかし、いわゆる先生と呼ばれる存在と弟子の関係性ということを考えたときに、いわゆる師匠から弟子入りしなさいと招くということは、当時の世界としては、大変画期的なことだったのです。普通は、弟子となりたい者が、師匠のほうへ弟子入りを申し出るというのが当たり前だったなかで、師匠のほうから人々に弟子入りを勧めるということは、考えられないことでした。ましては、相手は神が遣わされた小羊であり、油注がれた王という意味の「メシア」と呼ばれるにふさわしいイエスなのです。

自分から門をたたいてその門を開けて入る「入門」ではなくて、門の向こうからいらっしゃいと手招きされるイエスがおられるのです。そのイエスの言葉と行いに魅力を感じ、イエスから学びたい、イエスが示される生き方というものを、自分の生き方としたいと心から願わされたときに、私たちは誰でも、イエスの弟子となることができるのです。

イエスは言われました。
「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」

今日いただきましたヨハネによる福音書の15章16節で、イエスによって語られた聖書の言葉です。イエスが十字架につけられる前夜に、弟子たちに対して語られた言葉です。ここに、イエスが語られた弟子の本分が、実に明快な言葉で記されています。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。そうイエスは語られました。

このあと、弟子たちはイエスがローマ軍やその背後にいたユダヤ教指導者によって捕らえられた現場から逃げてしまいます。つまり、イエスを裏切ってしまったのです。おそらく、イエスは弟子たちがそうなることを悟って

いたことでしょう。しかし、そういうことを悟っていたとしても、イエスは弟子たちに「わたしがあなたがたを選んだ」という言葉を語りかけておられる。そして、わたしがあなたがたを弟子として任命したと、弟子たちに告げておられるのです。

このことから、イエスが人々を、そして私たちをも弟子とされるというのは、決して私たちの資質が良いからとか、能力にあふれているからという理由ではないことが分かります。私たちがイエスの弟子となるには、とうていふさわしいとは言い難い存在であったとしても、そこには、イエスによる一方的な選びがあり、その選びは極めて自由な空気のなかでなされていることを、私たちは喜んで受け取ることができるというのです。

そのことを踏まえて、私たちの信仰生活というものを考えたいと思います。私たちが教会に集い、礼拝に出席し、人々と交わり、教会からそれぞれの場に戻って日々の生活を営むときに、私たちが「イエスの弟子である」という意識を持ちながら生きるとはどういうことなのかをイメージすることができるでしょう。イエスの弟子であるという意識は、自分からイエスの方向へ向いて歩むということを促すかもしれません。しかし、その前提があるのです。それは、イエスに私たちひとりひとりが招かれているという事実です。イエスが、私たちをご自分の御手のなかに招き入れてくださるのです。この招き入れられているという安心感こそが、イエスの弟子として生きることの土台となり、この安心感を共有することこそが、弟子としての本分に裏打ちされた、私たちの信仰生活に他なりません。

ある牧師はこんなことを言いました。私たちが前のめりになればなるほど、変な方向に行ってしまうと。その牧師は、こんなことも合わせて言いました。熱心であることは何も悪いことではありませんし、むしろ、それがイエスの弟子として生きることの喜びであるとか、幸いにつながるのであれば、こんなに良いことはないのです。しかし、それには土台が必要なんです。それは、イエスが私たちをご自分の弟子としてくださったという一点です。このことを忘れてしまうと、それは単なるエゴイズム（自分中心主義）となってしまうということなんです。

この牧師は、とにかく一生懸命、自分に与えられた務めとして、伝道や牧会に励まれた方でした。しかし、ある時、燃え尽きてしまい、心を病んでしまいます。そして、しばらく休みをとることになりました。自分自身を忙しい務めから離れさせて、神と向き合うときをじっくりと持ったときに、気づかされたそうです。私はイエスの弟子とされたのだと。そのことを心から実感できたときに、もっと楽に、しかしイエスの助けによって熱く、牧師としての務めを果たすことを大切にしようと思ったのだそうです。

イエスの弟子として生きることは、そのような安心感と気楽さに支えられているものであるということです。このことが私たちの心に根づかせてくださるのは、他ならぬイエスであることを、私たちは信じて、来る日々を歩む者でありたいと願います。

祈り
私たちひとりひとりを招いてくださる神、そしてイエス・キリスト、聖霊なる三位一体の神、
あなたの招きに応えて、今日も礼拝の場であなたの言葉をいただけたことを感謝いたします。
イエスが私たちを弟子としてくださることを通して、弟子として生きることのとうとさと幸いを味わう者とならせてください。
イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。